俳諧一葉集

後編

三

へ5
利
1258
9

俳諧一葉集遺稿之部

古学庵佛兮 編
幻窓 湖中
坎窩 久蔵 校

京都帝国大学図書

一格手入て格を出る時を校く又格に入る時元歌諧にはる
格に入格をもてとりあて自在を以て詩歌文章を味ひべ
き向上の一路なれば仏祖を四海に矢とらんすべし
一手業不易一財法
一他門の句八彩色のごとし系門の句八書法のごとくすべ
しと彩色のあるとなるとはなるべし他門をかたらてきはまる
是我宗一とす

一古人は詩をよく細工しおるゆえ詩をよく作れども文章下手なる
上手は詩をよく所をおもうゆえ
一兼載化俗半ばは味なし
一古書撰集を中れこそさ手なる
一系門の俳諧を学ぶ者それ郭のゆゑ音韻をのの音の
日葉みのひさこ俗に俳諧越後へ貴白八時代
を考へ
一初四のうちは句をもとむ　それより姿情をわうち大
山をこえて向の梦へ下る　六尺をこんとする
ものは三尺を学ぶ　七尺を学ぶ　まず心を
んべ早き時は古人の胸中を知ることなり
一俳諧は中人以下はものなれば俗語平語にて学ぶべし

俗語平語をもくんじおれば拙なくしては俗語と元
来は海内一致すし俳諧は美聚集のやうなれば貴とし外は
よろしく味ふべし老し唐明すべて中華の豪傑なれば
句は四のいやしきを恥とす
一まをとをとをあし家ものはまをは中一の歌丸は先哲の作と味ひ
一まを来をてくなるべく　句の姿は青物の小篇なれば
よくよくみて初て激風を味ひ　情をべ
事をそなふるべし古人の句を
ふべくべくべく　附心は春月歌は梅花

右の説は祖菊口決なり

一或人菊をいひけるは半俳は宗匠の語をわひやをわるれば
仕ひいつちをおぼえきをめ俳諧にしかれのはなれ

翁わしをみならひて旅をせぬ人ハさして思ひ出ハ笑ひ御ハ若葉を
置てさりかへハそれて室のつくりかハ好ミて袖かも墨子ル
秋風の枕引かへりうつゆくも旅して去々かのかの心持く
はなりを詠つくして泥をしるつく杖を力に貫良ハつゐれ
こゆく八くもゆふれ余ハ空高を見んとて日ゆく又杖はし
きにとほり況や蝶帰にて露をねぐれ我ハ眼をいつまでかわして
情れなる事もあり　旅ハ保生の事つゐてかり月はるてけしきとて
見ゆれ一とき大和路にまけ入て遊ひ物にさをとつかれ身のう
きのみをしるもくしゆのしのやとをうらんとまうする村
駒楽ハいるかにけ肺山ハいとしかすくしるる詩すまよく似する
方ねとゆかゆひたてすむかまするの詩ハ叢苞のおもむく所なく
咲かしかつきまゐをえさ

草臥て宿かるころや藤の花

句をみなひかる事に二所くおもかけのけしき
旅の労たるといへん

一 秋のはしめ更級にいやましてしゆめく窓の月ハ哀ふかき
秋ハことにおそろしけふまて猶ちるかの音
方に浴しさゆるまのかる物哀猿の声を聞てまた
まふから古人の詩を詠る處の白猿声やくゆけり自もの入
亦よく人の知れハ其此の名句といへんされと我句のけしき
をしるハ余今此句のえんゆうとくし

いなつまや闇の方ゆく五位の声

一 山里ハ万歳おそし　梅花

翁さかん此句をおくられし千返絲ニ此句を一義ニ付たり

へくい山里ん風さく梅の花て京案内のきくとふんとらくんと是
しよやさけさよりふん又ハ里の梅さくらてさ万案内の本めぐす
よとさ京あけり小謡や俳ふん翁ば是縛りきさのとんなくて
古事の水無月五條ゆうさを通りきのて幽すゆやしの折て
看板を並ては文らんの外ハ案内くと記す体ふくらをとのし
すみそしくハくらんの案あるへてまし聞き学ひけやしてきかの
こゝくひハはくらん病ゝ實と実とやしき

一 翁尚白ぞものかくゆりしハさに世の案ハされ出府かくしを付句
人しきよりを趣向ゆりさ出しくべひ入る句とふりしと
そや宗匠の席さし坂ひとり見ゆけて枚さものかま合と
ま右句ゆり是ぞてそしとやひとくをハやすしく小町の姿ゆれと
句中の空さ家まてとゝるし千方擬義の思ひ出すきまし
ぶかくうさる意をしけとめされハなれしとくくるまい句
を付るこれを俳世の句さ存るより古とその娘さるとききえ
よる宗案の字さえ俳中の哉とさえるを二字まくみえ
教さるハしうりしとし

一 今季貞享の古式をゆりしあ晴冬の俳文て次そし分しまとハ
ゆりし翁林介の物すよへきし丈草子脱凡兆なとゝくのゝし
文甚ひ月の花の座を定るもの也

按五ヶ條

一 月花　一句
一 出合　去嫌
一 短冊　打越
一 當香　沫剛

一諸礼　　俳止

芭蕉庵桃青判

一諸礼俳止

一出合を近但夢先

一一句一直　　宝月花一句

右三ヶ條書式也　　芭蕉庵桃青書之

行脚掟

一一応ふるまひ再応すべし樹い石上不応とも

ゆくへあるべし　　ゆくへ思ひ

一宿手寸後ふるまひ等ひ物の命とゝまるべし

一君父の警ゆるがせ門かゝと雖ども仰て天をいなむべし

見ひきゝ情ゆれハし

一衣装器財あ過すべし　　足さゝゝ足さゝゝ足さゝゝ

程ゆへ

一魚を獣の肉を喰ふ時ハ美食珍味手ゆけ人

他事ゆゑ雖ども菜根を咬ん百事をあらんか

をおもふべし

一人のもとゝ先ゆゝ己ゝ句をもとゝ空を背くと無ふ

四季ゝゝ説ハ説ゆゝ聞ゆ善さゝハ

一ゆゝ喉咽の焼ゝゝ所芳の命をおこゝ雖ども

中毒ゝ陥ゝ

一ゝ名ゆゝ筆ゝ書ゝ一枝の枯枝をもう渡御ゝ

一勇て酒を飲へうれ饗庭子を固辞しかくこの微醺
ハ之止て紙子おるれとも梅ふて祀家の戒多子醒を
用ふる強を以先ハ酒を吉さうの例を惜むべし
一船路系代をうまくうふれ
一代の程を年を色の長を那をて多れ人を謝さ物のも
ほうとうも甚いや
一俳諧のお鈴伝すくうふれ鈴話如れハ侍ハて芳を善し
一女性の俳友を多くうふれ師を朱子をいりぬてとれ
吐を子歌を交を八人をもし侍へ地名男女の色ハ闘を言
石色多く流落すれハ心数一多ふれ山道ハ主一学道うく
多て能おのれを有へ
一主ある物八一枝一草をうふれ山川江ほを多ふ

ほをめるや
一山川四海を多く身入て新を子私の名を仕ふを多れ
一一字の師恩をうを多を多を多れ一日の程を多を多を
を多れ人の時よるを色多の礼人を多ふ色を多ふを多ふ
一一椀一枝のを多れるを多ふ多ふを多ふ又俳諧
を多れ礼の多を多ふ人ハ世の奴しけを子入を多ハけを
人を交へ
一名を思ひ見を多ふ且芳の仏御を色ハ多を多を
を多ふ人を芳を多を多を多れ色ハ跡を
ほを多を思ひ多ふ
友の酒を系門の彩御ハ性を人を多を尺を多ハ性の鍵
を多を仏御を門を多ふ

利歌の物をかりて仮名をかきて世にやあるべ
古人のかきそこなひ自己の縁のものにかたちをかへ
不等歌をつけて物尚を愛の流をしれる人の和光をし

一　蓬　半　みなもとの伊勢守　仮　箱

義源川ながれ清き人の文をかきて自己の法門の
ごとくしかるに古今の仮名をかきて伊勢の人の
式のごとくにかなめを法代をへいにして仮名祖師の
文を胸中をさとりて歌をつくれとも祖師の
仏法の家にあらざる人今日祖師のかしこきをおもひ
むかく道理和尚の詞を仮名和の一字を冷清清のうるはしき
と蓬半を歌しくかくのごとし

一　かしこきかの杜の松をかりて箱
仮名の仏法の海をくぐりて世間の法門をかきて
世自己をしるべし自の中をしるべし八万の法門
をしるべし九万の法門をしるべし八万四千の法門
いかで世自己をしれるものやとは本来是八万無義偽なり世自
をしるべし　才三　才二　才一　才六　自蓬半　才三
才二　才一　こんぶん箱をしるべし　自蓬半　才六
只仮名の杜の松をしるべし　自蓬半　本来箱をしれる仏法
一　歌をかりかきものの杜をしるべしのみなり
れいをさきにかみやまの入江を詞をたてしるべしの
ものを尺の只服をおもふべしのかなれとすれば
一　歌人ぶのかしこきかの世自己をしるべし仮世間をしるべ

白えてと切字のてにをは決て白えをとゝめるて
菊日秋ハ切字のてにをはなく年と言の詞なを夢て作さる白と
ゆゝしく只服部の言葉画きをとゝさはさ元禄くれのあ
ゝこれを見て作れ白とあり立ゝるてゝ所の白えをの
言葉くれ秋これをしてゝけるも

一　ゆくゝ年をは江戸人をとをしてゝる

菊日尚白ゝ新く直江ハ新波をあをひきハ作きをゝ
ゝゝ波いゝゝ作ゝ和さ本を尚白ゝ新味をゝ波の繚乱
とゝてゝきをを切もゝ仮ゝゝ繚乱今日の言作をか
菊日志ゝ古人と共ゝ和をきをとおゝつををさし新をを
らゝをを本代一言ゝ作ゝ徹し作きをを直ゝを新ゝゝいをゝ
代幾のをゝちをん行春新波をゝハ春ゝゝ代ゝゝふ

風光の人をを蕉翁をゝ和ゝを作ゝを菊日波ハをに
風雅を詩ゝ人ゝ式ゝの集を人ゝ悦ゝひをゝ

一　此本戸口　頃のさを作さをを此　月　廿角

旅宴摂の対代白をを古れゝの月宴の月と重ゝ作ひ
作ゝをゝ作の宗議をの月ゝゝ蕉を初を文言ハをゝ言
蕉の戸人と後ゝ菊日いをゝ新ゝ作ゝ白ゝをゝ作ゝを白
代角を宗を入集をゝ作を大ハをゝの菊の文を等の戸代
作ゝ代本戸し作ゝ新ハ二白ゝ大切ゝれハをゝ如板ゝ乃ゝ
ゝをいゝをゝ作ゝをゝ本戸等の戸きゝ作物
外ゝ本ゝ代角を等の戸ゝをゝ尺れハ宗ゝの言色し
見ゝ蕉門をゝつゝを尺れハ代風情ゝ作れ物宴ゝ
いゝ作ゝ外言ゝ角ゝ新ひをゝ作ゝ

一　くもやまひかりはなのいろ　猫の恵　俳人

菊は白と伊賀うつせる方人（かたうど）を俗情ゆゑの一ふし

ひとりわかれてこそかれ風雅うせて本性をゆく

ひとりとしをもつ人の名四方をうく人のもてあそぶ

黄白おのれ知れども変化をもて初て本性をゆくへしらん

宣ひしことを

一　本こうしに二ツ月の吹ちらす　萩子

本こうしに地下を変さぬ時の如　古来

を本を二ツ月と云ふ吹ちらすゆゑ手ら白を

千ちまれてこそ変の菊を手ら白二ツ月をもつて化さ

き花間を除かさるこそ所ゆ白八俗を以化ることなれ

今俗のうれ白を共化ずとも信ずるとの言葉なし

一　菊は白を伊賀の俗情を化ずるの義の所　萩子

菊は白を俗情を伊賀の俗情を化ずるの義の所

ゆゑ川のしかも文華を伊賀の俗情を化して古

なれども千ゆゑ八俗の白ゆゑ俗情をうれ和ちん

起ちんを千書ちんとも本しし本の見　伊賀　杜子

変ちんは俗情をうへれ八ゆゑれさう　白　化ずるを

ちんの舌千のを千和の器　白　宗祇

俗ちんの俗ゆゑ川ゆゑ念師ゆゑ　古来

うれ八善変古め来は功書ゆゑ迷ちん　好の吟し初の

冠八化ゆゑ中ちんし菊白和ゆゑ白八今詩をしられ化ずるの

変ちんゆゑ変ちんを風雅ちんゆゑ一好花寒撰の好

ふるしひけるを見て今の翁に連ねて入句やしてるよし

一 おもく揖しくみえ此より帰り 郎上 野水

模らるの撰の時去来句此句ハ渉の所を捨てらるへきよしむけ
よと同意し入集せらんとて翁曰加茂の時分をさしへてよりす
来る所の心はしくまれハしるへしと我とかくるの事を旨と
此するの物故ハ翁曰句のさへとしまて我はいかしハ一句にて物はたらきる
さしてはせして入ハ入らぬし撰者の心ぞへしとし許されと
深く待る

一 君か春蚊屋も前にて掛りぬ 越人

翁去来に語て曰発句ハ蕉風をされハ去の句に汝はなれ此句今
句数に蕉風をもと見るに八文字みも来たり此句故帳の
蕉風に掛りするをしれり新翁を明かにし置てかやの
発句となさすハ世上かくるぬるをも見る所を引かけて宗匠とも
也し侍る前に書く句表与ハ此句を既に蕉風あらす
本りてハ是に渡るとも只て是を疑ても只への句にも

一 振舞や下座になをる去年の雛 去来

去来曰此句ハ予か思ふ所ありて作る五文字を烏帽子親
衣此にて是を受て京物ハハ心徹きよ渡さすし下に下しやの
ハ侍けれとも今の翁をも置て問ひけれハ翁曰五文字にて心をも出
す置ハ侍る也人の無や来へし十分ならぬ事も振舞にて堪見
ふるへしとかされしとし

一 田の畦の豆伝ひ行く螢かな 万乎

此句初ハ翁の斧正をうし凡兆か句とし猿蓑の撰の時兆か云
此句見る所なし除へし去来曰豆を伝ひ行く蛍か

光明の秋の景色風姿けれとも兆ゆるさん翁曰兆自ら按ハ
秋にあらん其伊賀の途中の句とも是に似たる所あれは直
しさる句をとらんとし給ハず方手の句となりぬ

一 大年もおもしろし年ハ　　凡兆

元の文字を定て其ハ美く其来の句し其本ハ此発句季なし
し侍ぬ先様に美いし花も雅人の心をも切し其本の物
すれ共題詠の古人ハ花をおしみてけるときも暮を惜
人をうらみ山野にゆきくへしも此をこ身命のさえに及ん
様し其道ハ節て年の数とこそ定深かるらん侍侍
雅は其に其翁に詠ける翁曰そこらハ侍独の初案に行ふれ
とかりて其様凡兆大年に辞とする翁曰たとへ此一句ハ年
の数しいしくも其年の比と大事なしまいる

一 散るも用ゆらん花の落　去来

翁曰花の落とハめかれぬ名所なるや古人も落の字に狂
やうれしくくと細工しさる所に拙ならしすへの心にしと

一 月雪や仮にもみえん甚しき　我人

様との様の月其来に須の伊丹の句に論らうれし事に
ゆゑくれや論を其人ら作り我人の句入集の時伊丹の翁曰
月雪といつて行る一句とするにも苑足してさらに其風姿ありて只是
続くけられやとさつましと八格ある事されとも論中の俳諧を以
其趣向にて俳名を以句をかさね作れハ也其意しゆゑへし　入
つきゆみて折もあらんとし

一 まとしれける常もかきしもの雪の朝　其角

其来師に問て其角ハ論すに似たるし作るる所の雪の吟

付ける事成ぬ所ハ言葉さんとする所ハ定家の心
なりさしてもとれぬ事ゆゑ
俳諧ある事ハ

一　をゝくひとれのの山ゝ山の花さかり　士来

これハ桜らの二三寸ハかの冷し菊ハ句ハ
事ハ山ゝ山ゝ千本杜ハ桜ハ芳野ハ桜
さと花の文字成ハ花ハ成ハ
ハ成ハ角ハ
事ハ句ハ
えんとう冷しハ
うけ合一句事ハ

一　あるハ此所ハ菊ハ　菊

泉郎ら有れハ
桜らの桜の対式ら一句入集
ハ句のかけ
なりと云事ハ
対ハ
ハ桜ハ
ハ桜ハ
桜ハ菊ハ句ハ
ハ菊ハ

一　月ハ　士来

菊上海の対ハ
ハ言の方ハ

いろ〳〵ひく〳〵やさ未さ〻ん句さ楽しさ山桜さ此おしゑる
岩ぬ行さ又ひとり隠家さ尺仕らとナ此日こゝさひらう句
の立ゑと和のれと為のゝもゝさんこゝいくはくの風流あるめ此日
称の句とゑ〻しさ句八秀と拾まして立入らるゝん
寺未さ子ら趣向八拾二三さ
かし拾先の為さゝゝ考こ子自称の句さ此しゝれ八拾
め殺さらひくさめ此句面さまるて十信さゝまてゝれ去
さ四さ紙さゝ芭蕉の小文八師の自撰の集さ為さ四ていき
ささ尺草稿なゝし迷化ましゝゝ寄ナ付る八子ら当句
何句ら巻子入ゝゝと句ふ此日参河人芭蕉の小文集さ入句さ句
おゝゝものハナまふゝん此さ分のしゝさゝさゝ

つゝら笠此ゝ笠さゝ句　文草

菊報恩の為ゝ人さゝ拾俳の句さ求めて今日しゝ参花俳の句
一字の為ゝ加ゝ三ゝられさ此しゝ寄ゝ拾ゝられさ
此一句のゝ文字も未されらゝと言ゝ寄ゝ本さ拾ゝ財八ゝら諸ゝ
勅さ拾ゝ為さ芭蕉ゝ拾ゝ為ゝ拾ゝ豊いゝ尺拾んやゝ此拾ゝく
拾ゝ拾ゝ知拾ゝゝ

一　ゝ寄句　さつむひ上れ　花の　雨　九兆

此句神さ冠れ菊さ付ゝ此ゝ冠さ拾ゝ
九兆ナ芭蕉さいゝさ芭蕉ゝ
ゝ寄ゝるものゝ八系二段俳句さ
ゝ寄ゝと八俳ゝ句さ拾れゝ
此ゝ句俳門の人句拾ゝ八拾ゝ
芭蕉ゝ句八文寄ゝ芭蕉ゝ

一 ゐのしゝの寝にゆく方や明の月　去来

此句を伺ふに翁暫く吟して兎角を宣はす去来おもひ
かやうにて(?)と思ふも功ゆへ枕のうへの事を知らる
やゝしばしのよしを待れハ翁曰世にかるゝハ古人多く
言れハ(?)にてめしてかゝ人より山に入(?)の詠次かくる荻の上風
とりよせて和歌優美の上にさへ(?)しかりかしらさる(?)俳諧
自句の上に(?)ありてか化(?)文字(?)の縁なる事(?)一句
扨(?)しおもハれハ去しく案しめくとして(?)に詳なき(?)
去来に(?)待(?)て此句ハ都にて(?)つらねを(?)ける(?)法(?)大事
の和歌の句案(?)しいよしを編(?)る事を(?)去来(?)とて

一 去来か(?)若(?)の時(?)此(?)しとて(?)への人の句(?)
(?)の(?)の合(?)ニ一筋(?)して次之(?)ますと(?)句(?)の此

句を深くて(?)沙(?)白(?)此句ハ(?)のことく誤(?)ゝまりて(?)もの(?)も(?)
として(?)例(?)に(?)大に(?)動し(?)此句(?)ものを知(?)
此頃其の外(?)に去来是(?)ハ(?)の(?)句(?)入る(?)や此
終(?)に(?)かくあるまゝ(?)待(?)とも(?)是(?)けれとし

一 二跡(?)に信(?)ふしてけふや糸さくら

翁路上にて去来に語て曰此時其角か集に此句をいれて(?)やひさ
入集しけんとし去来云多く(?)の十句(?)ニ吹(?)る(?)所完(?)よく云(?)
に(?)待(?)や翁曰(?)ひ深(?)て(?)何(?)か(?)去来(?)におゐて(?)肝(?)語
するとも何か(?)是(?)て(?)此句(?)に(?)多く(?)へと(?)おもしく(?)て代(?)之(?)れとしそ

一 手をはなつ中に落けり朧月　去来

魯町に別るゝ(?)時の句也翁曰此句悪(?)しきにはあらねと功者にて云
いひおほせ(?)しに(?)去来云(?)さして(?)今(?)其(?)を句の上にて

[illegible]
付れと句の上へ別へしとゝ[illegible]

一　鬼灯や昔代水は涸しつゝ　史邦

[illegible]

一　[illegible]くに[illegible]れハ涼しかりける　宗次

[illegible]

一　玉棚のおくゝ[illegible]や　[illegible]

[illegible]

一　[illegible]

[illegible]

一　[illegible]

たゞ今作者一〳〵試て此句を弦して受とられハ又見る事も
おほく大笑ひしあひぬ

一　つかミ合子供のたけや麦ばたけ　　游刀

れ此此麦ばたけハ麻畠とも云れん去来に麦麻に毎て言し
ハ此を論ずる箱回又ありと此めの論ありし事用ありと制なひ
ありて見る人察すべし

一　岩鼻やこゝにも一人月の客　　去来

去来を旅ミのハ秋風の時あらし此句ハ此集の鼻身あり此句志を
こゝろみ侍る亦又あやに帆すらけく一けて見てをハいひそらしやと
去帆も千ずさ寄て句の時あらく心の緑ちるかつたん箱回沖此
時あしいふて又一ふりてうくのてさかも句ハこゝろ云勝侍るさし

一　見ぬ此所見合すや帰しきん　　去来

去来此句を五月廿八日の夜曽我兄弟の五ヶ所大会にして事に此
時る作とも作やけんすしむし先源氏の初る事の作渇て作くさき
あひすく念式部にもさひやうすめるおもへとかゝりて一句をも他ならぬ箱
回ろ香康衆とも此てうに一句まさも深きも作貴角に作りて同あ
ありと深川すら作しまふ作らん此句ハ心得ありて何ぞふ此去来に
心得るりて詞ふ此なとなかんハ怪うかりも此いひ深きもさるし文字に今の
作者ハさるのしくかけて他るめれハ見れハ今点の中よくするとも作る云ひ
ん

一　まさかる札にうら見ぬ咲るほか　　袴
みかくと初ほけ　むしうみ　横　やし　　去来

去来云初ハすこし居る事もちゐの書を作者ハりと作侍る作衆かふにゆ
此たハ作ありふ作されハ文字よしもて此句よしも作且さりて箱田がいつもてとひ
の附毎に作あり去来に初や此の去年に探姫んそのありと見て初る

付けたりとよくたべさせるとの意味をけしかけるように外出さ
せるようにと沒方をくくると思ひこんで仕置一件ことに菊田神の
白分の八三十樽あるくしに付うけて直すべくとしたる金の五文字
ゝゝゝゝゝゝ

一　梅　手すさめれば枝の百　吉末

これハ家直の招し菊沢川ゝゝ内ゝ曰ハ梅八二月の咲もし吉末ハ
千七ハ涙を家直の肥ゝ用ひらるゝとかん

一　舟　ゝ　舟ゝ　西　玉の　ゝ　玉箱の白し

沒ハ試千五ゝ七ゝ舟ゝ白ゝ出ゝ出ゝ吉末西ゝ俱ゝ菊田
ゝハ手帳ゝ書白きゝ沒ゝ出ゝ見ゝハ手帳ゝ出ゝ菊かゝ出て
上方の舟吉末西ゝ白ゝ俱ゝ千ゝ帳ゝ出ゝ菊田舟の中ゝ吉末
ゝハ玉ゝ西ゝ白ゝ出ゝ玉ゝ箱ゝ白ゝ

ゝ張ハ角さ　もゝ　有の　や　吉末
吉末白ゝ白ゝ出ゝ帳ゝ菊田ゝ帳ゝ角ゝ
張ゝ白ゝ百ゝ

一　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ん　北

ゝゝ白ハ巻ゝ尻巻ゝ菊田きゝ出ゝ
ゝ百張ゝ二白ゝ出ゝ白なくゝゝゝ

一　蕎　ゝ　ゝ　身を　す　沒　吉末

初ハきゝ出ゝ百ゝ菊田吉末行ゝ出ゝ沒
ゝゝ白ハ次ゝゝゝ同ゝ出ゝ

一　沒ん　ゝ　ゝ　沒の　意ゝ　箱

咲ゝ出ゝ梅ゝ箱

以おなじく射去来に初句をはるひ付んといふこと第
廿付句をとるこけもはかく付まじ

一　くろこしの実　樫の木　森
咲花のちりしさくら門をもりの入り　菊
此おなじく射去来に初句をはるひ付
寄をとるこけふるたる水の付
句をとるれハ初付に尺をうひろ

一　綾　紅　紅葉　つつさりの実
注　くちなしの実　ふるもりもめるる　去来
以おなじく中きくしく付あくしろ菊四ふ上弱の紅
ふるくしよりて去来ふれをゆるやうに式句をとる付ふくる
好春に上旬の紅をゆるく立こ句ゆう並門の流水除掛

ふるくと益す

一　ふるかりつれ　秋　紅　正秀
中きんし中きりゆくる有　彩り　去来
正秀の中三しほめて竹掛る紅をまふ子有流こと
付付ふくと第初ハ茶所のひろ世秋菊去来
地翠春に六四ふ菊四をとるて正秀に金を孤宗ふ
紅ハ紅白ハ赤ふくしと四を受恒すふるとを上紅白と
白ハ紅白を赤ふくしとを一枝のふるいくふ
四ふ紅の紅白を付ふくつさいとをの金やふくふ世
風雅の翠し不無を付ふる風赤紅白をもふ正秀息船を紅
す二つをふくとをけしぶやの金をふくふ初のひやふ
中三付ふる赤白のけしふをて梅紅赤陸のふれふと松ふ

[illegible]

一　[illegible]

[illegible]

一　[illegible]

[illegible]

一　[illegible]

[illegible]

[illegible]

一　[illegible]

[illegible]

一　[illegible]

[illegible]

筆先にて以無分別に作すへし言ひ又は誹諧にて風體
ありんなとのことはひるてふとをしかるはひ分切字に引かけてみ
つらふ此集の発句に侍る萬よりをさし此意を顕しすへるはくら
よく此両の句なとを評しまはひらく句姿の句姿なといふての
物語りハ定なる唇部をつうてもとゐしろう
一 卯七云発句に切字を入ずとハめ句ニ去来云前に侍り翁曰此切
字なくしてや去来云いかにして侍授の所ハ自分ヶ定此しに侍る翁
曰めつ去来云あまねくハ発句ハ一本のものとしいへとも楷粗云
附句ハ枝のきはしとなりいへとも全ならぬ楷粗附る句ハ切字の
なき世にましき発句の統し翁曰然り古へのれとて又ハ侍るを知る
なり是を伝授すへし切字のるのハまた誹にてハ深く秘すへき
ありて語るへからされはあら必ずふかくしるときへしときハ秘すへし

さし八是のこゝろなれハ世人まつハ志まつく尭につゝる第一切字を
入る八句をきゝるあまし切る句ハ字を以てまてもいはさる句此
きれるきれさるとしるさる作者のまたも先達切字の数を定らる
此定字を入る時ハ十に七八ハ此のつうら切る也然二三句ハ入て切
きさる句又入ずしてきれる句あるとにおいてハ此やハ口合のやにしハ
已前のしきてきれハ或ハ是ハ三段、切れハ切れとに名目して
伝授するにはありて又丈草る向ひ翁曰云ハ三十一字にしてきれ発句
ハ十七字にしてきる夫字数入るて又或人云翁曰切字に用る時ハ
四十八字みれ切字し用ひさる時ハ一字も切字所なとし是よりハ
されはなとこれして降子一字とを表すて
一 卯七云猿みのに花をて楷手寄るくハめ句 去来云此みをも
と楷手誹ニは云翁曰前ハめ句 去来云猿みの花ハ楷平可なん

とゞむる一通りハさることなれども花に貌よき花なしとぞいへれ
やかましき花やかましとはいはずして本意を失ひぬ吹く花ハ古今
そのうち朝より思ひ侍るも此句されバ古ハ四季のうちに一季
色桜をむすびてやさしき風情にハ手にかかれバとも作りなし
されども当季の桜などハ残れる諸なれとして気をきらら
勝一つ残りて咲けるを見るとき咲くれハ句意に多めれと吹ひ
きひろう

一 卯七状に蓑門もし未熟を一句にても挟むハめでたきの言本字亭
此る所とふこの状日古ハ亭の句を見きまわし動ずる二句以
上よ句になること礼式の法と一句にて挟むハ大切の発句の
挨拶あるらんハめでたしとし一説に意ハ法場の命の句なれバ
一句にても挟べからずとてそれ大切な枠中にも同じ事り一句

またもや挟むといふも大切に心得る所とし此かれ〳〵書ハ連一句
なれバおのずの紀念ハ恋とも書けるを又挨拶やらう又三十韻百
韻にもあらざるを恋句なければ一季とんだものはしら地とすかく
又ハ大切なる所にあれ連句千句つゝまりに二句一句にもあれハ
章として卯ハ水を中連句なれども又多くハ連句より句法を
和とく一句を不知本手なんど此所にて連句なくして付侍るもの也ハ
二句より五句ほどへ付合のうんめんひゞく付合として一句も
挟むとし若うら紙にても付合を四のよく恋句も挟むも
おのづと同じ物の上にも然るハおそれあり付られとも又ハ連歌
然にも俳諧の上手なれバ初心ならず春の古人の志のれをふれ
古人の所へかゝる事をもなきあの紙に此頃書の作にて侍らん
すべき也と思ひ侍るのみ

一外ヒラ蓮門子宵闇を有子用ひ行や古歌を以て句作
ヒラ源門の今を宵闇の句ゆゑ句中に有ゆゑ
あり子月の句さへ拙く〳〵と且子月を用ひさて句面を
月をとをふへとゆゑ月次の月を宵を入るゝと云
一泄彼ヒラ京武の今を多を和歌を恋を無を無子和
曰多を和歌を恋を八雲月八神祇なるゆゑ恋を無くと
を以退を古ふ子武子の句ゆゑ一句に和歌なく
とも既に多を恋を八和歌なゆゑ中えを以ゆゑ
と石書し
一翁曰世上の俳諧の文を人を或浮文を俗名子和ヒ或
平和家の文を子浮言を入て紫ゆゑ俗しゆゑ
或人語を云ふを今日のさのしをを以ゆゑ

西鶴ヒ浮世草子の姿ゆゑ本流の文字八句を化文を
立文字八ゆゑ浮言を加ゆゑ俗の言ゆゑ
一翁曰浮名ゆゑ言ゆゑ
而しの後を定家の俗を也名の歌句を拙句
俗ふ八拙句ゆゑ
一翁曰俳名八俗名ゆゑ俗を用ひ
俳諧ゆゑ用ひ短冊なを和尺を和名を
子ゆゑ字ゆゑ
自俳ゆゑ又世ゆゑ用ひ
又の句ゆゑ句を用ひ
一言葉を句の姿を

一ときとく付きとやうん猫みの一対の言ひ付け性とえてしの
一兼河之五煩るハ古来より季ハ和言葉さしの白と
さ和て人付る古来の季ハ無くさ物ハ
（一国一）の日季ハ一と柳しさん八海老ハ
とあり始ての秋く古木の季ハ
日ハ八月季ハ定て五月ハ白と
一古来ハ俳諧集の撰ハ花ハ
ゆく歌集の詩ハ
集めの初ハ
古の花ハ和歌ハ史録
されハ人ハの名付ハ
ひさこ猫みの菊の名原菊の小文ハ
の附ハ
八し浪化集と
一菊者千日上千宗因なくん八俳諧ハ以
一菊曰今の俳諧八
千ハ
一古来ハ門人千歳
て
ひ又一句八
十七字一字
ハ一句
一菊曰歳句八

義て曰義白八泊てて人物三三六集の物をけるひこうのとおのく
ふうてとくうう〳〵し

一詩六玄義白八五合をものし箱曰られけて仕ふるゆうを人
をしるしけやとも

一古来玄泊曰句子白紙をといみちをくへ文字を詩の体のゆうたとへハ
ふうてつてしく小歌をふうとおゆくうてし小歌を詩
と化れハ白紙のゆうとして古来玄泊曰
古人をものやおをつんとしいるやとし

一箱曰義白答ふくさんしかく仕れて仕白八三変千山ゆうむ
うハ付おとゆとすす中性八心付をゆとす合ふうつう御青馨位
を以付ふとふふふふ杜年玄いゆうとゆ御青馨ハ稿とハいくゆ
古来玄文考ハ泊ふふをを白ゆ是をふふふふ

いひふふしふの文泊の詩を泊て詩を代ハ押し初て
赤人ハ為れ詩ふれ神のすく　史邦
ふをふをいつう合点ふくし　古来
泊曰ふつうをふゆひをふゆをふをに古来ハ三十椿をふふ
れふふをふふふ悦ひふふ文をおくハふ泊ひふふ
ふつうをふをふふふ白化のゆやすをのふをめをのさう
ひなれハ冷暖自知の泊ふてくさふしゆふふをふゆ
ふ赤人の居をおをふふゆふふいつふ事をふし
ふを泊くふをふ為をけふれふふをふふ合点ふくしふ
おふつう泊ふくふ味ひふふふ御青馨ハ泊ハひくふふを聖ハ
ふれ椿を銀を泊をふふふふふふ
身泊ふふき古刀ハ泊及方を及ふ

[illegible]

一　[illegible]
いのちうれしき　撰集のさま

[illegible]ハ初秋の夏侯ハ[illegible]ひと付ける菊日記と[illegible]
[illegible]の境界と[illegible]
[illegible]

一　[illegible]
内[illegible]

菊日[illegible]ハ　詩

一菊日[illegible]ハいつ[illegible]天象記形人事学本[illegible]
[illegible]

一菊日附物[illegible]
[illegible]

一菊日一[illegible]

一　[illegible]

一菊日さ[illegible]　[illegible]　[illegible]

一　[illegible]

菊日[illegible]の[illegible]　[illegible]

一　[illegible]

菊日[illegible]
一菊逢花の[illegible]

似し侍らんや箱田志侍りく今の風なるべし五七手もまた又一変

ゆぶんとし

一文葉句長哥短哥などと混されたるや箱田哥のごとし八雲
もとよりこれをしらずや时に季吟千其事をと哥
とよ行り長哥短哥此名八混不浮ものなし然るを古今集
に短哥の詞とさく様なる哥なるに躬の同類の長哥古哥
なきべくななれる長哥などとさしよりら伝人様く不決なるは
未だ字の讀りし短哥とさらんと歌集に短哥八葉紙乐集よ也
よりされ三十一字し長哥とは六尺所爭思すに上古の哥八皆
といふ長哥の体裁しやれる三十一字此体あり是を短哥成八
反哥とさく長哥の哥すてくりたのれ八長まへ八共此哥一
首残八二首としきく長哥しいとは云とも既に三十一字のをと短
哥とせし也是八絡も那ぞ長哥したりへ長哥此名目ゆゑくまる哥をも
長哥しとん古人のふれやすらく長哥と云八葉集以後の名目とお
もなる三代集以後代々の撰集に三十一字のをを短哥とし不書や
同しくまし古の哥八それ長哥と後の哥八短哥と唐まで言詞今体
をいかでとし　覺之八此亦の先達としいへる短哥の說とすて詞
出まへ長哥とさらん哥とて絡古人や稀にあるが無益也とき
强りをとさへてんとするよより稀て絡八しき後とも付るし清輔
鈔等八ひとく長哥を短哥三十一字を長哥と定めらるて論究
鑿開云べからし

一西哥の句して（の哥人なし古今三代集をを祖本とするをもとこ云無れ
とも手强する哥此三代集を学ぶものに似めんにゆるすまり和
箱田哥もその人しにくもの於くまでの人の寺家をと知り中々

定家こ降を係するとし貫之躬恒をもよきれうかなるんぞ
一 正通曰古今集はやすりしられぬなるて除かるゝ人そしられぬぬ
花やそうんきしゝゆぬあかて咲ある一集は此三をと解す
一集一代歌をかやしのくの係ゆるとや菊田貴之の亡ぬるとは
足しよりかもしのるのハしもの人ハきらぬうくよくもとおるハまりしへすりと
くしらんもろこしの詩ます左懐の係ゆるうやいつきや文華の
幾係ホ杜子美うよめやしをその例りをと詩人のまれ踪とやる人
詩くおそくきるのとそし廿詩もおつれとたまれきり
あふん
一 本節 問中将の哥人ハ誰あるや菊田両行と鎌倉の右大臣
一 末守曰古今集ハ今ぬ体する古正本あるや菊田定家ハ以古
のなかる正本例りとし而そのあハ定家卿の深刪多次のふん云

一 或人問古今集の序に六義をと説季吟僻説ホ六義をよくのい
を義ゆれるまで代菊田坊まて六義ハ詩の序よりそくとまふ家の義
なりしるハ詩家一撤の者をゆかれハむかきれよせいふまし六義経濟
此説ホゆかれ本季吟に此まてもとは季吟をかくとし述るあの
謬しとときそれの説素堂ま季吟ての管をし評くしに素堂も微
なりとん箕ぼへまて其へ六義をまれ称おかしとかまへり風雅
頌の内ホ雑比興ハゆくし殊ぞまれ称おかし是そとハいさる歌川
とも引まきれ義まるものへりたう風素あらり貴之ハその言これを
論をぬかりし六義の詞説を貴之の老まりとよそうた此詞説もれ
あ文を強ありたくそよ例そうとも定まる説とおふのをし知し
あ和哥あふぬまてまくるりゆそんるとも其はしとめて風雅
の二八哥うてんえるけるとなくし

一素性ハ今の人にまさるとは申すまじ
人麿の集ハ詩の三百篇のごとし　万葉の体裁なるべし
詩は古今の能はず詩歌の体又似るべきにあらず
是を用ひずして俗をもつて雅をこれを伝て見れハ
雅を捨てこれを用ひるハ雅の風俗をしらざるやいなん古今
集ハ俗にして雅なれハ歌ハ俗言にして雅言にあらず
とよみ人しらず歌ハ歌材をもつぱらにして体裁のごとし
くなるべしとなり　しかるに千載の撰者ハ
此説をもつぱらにして予は一説を立て俗人
如七十とも上流の人
言葉にあらざるもおのづからかけはなの
面の大体をもつぱらにして詞の巧拙をも

作りしに世俗言葉をもつぱらにして
さまざまの方をもつぱらとうの大体をもつぱらにして
しかるに今世俗の作ハ人の心おのづから
ものをもつぱらにして世俗の和歌をもつぱらにして
くとも面を異にして形人の少年微妙の風体のゆゑ
を立て作ハ格をもつぱらにして扇をさして見せ
ひしてもくるべし
一万葉の言葉を広島集に作ふんとの義なるべし
歌ハ
歌をもつぱらにして和歌集ハ集作ふんとの意
志をもつぱらにして歌ハ撰集ハ
俗作ハ作者三人
一正義四海の中をもつぱらにして俗文をもつぱらにして

俗文とそ[illegible]文の詩八俗[illegible]文格の文を
[illegible]て俗文を尺て俗文と思う[illegible]
八[illegible]俗文とおもう

一
[illegible]
西[illegible]
[illegible]
[illegible]
草之山八只青山雲八只白雲之[illegible]

一
[illegible]
竹林を[illegible]
[illegible]

一式八古式ニ倣ハ
一[illegible]
一古代の白文を[illegible]
[illegible]
一[illegible]
一尺[illegible]
[illegible]
一代[illegible]
[illegible]
[illegible]
一[illegible]
[illegible]
[illegible]

ひらがなを以百韻まねしぶめる聯の宗義と伝授ハ便宜を
我ら業の変化等今日世俗の上手しく系伝授ハ必ず用ゐ変
文よりひらがなを以一新しき宗義をよく味ふへし格ハ中
書の伝授をひらがなを以書きひらがなを以書くなり其ハ
まて変ハ和歌をひらがなを以て書くなり更ハ新れ
伝中むすしの伝授も大うるハ坊さきびしく利をかるる
系伝授ハ和歌の必ず新くなるを以て和歌の上句を表合と
和の情を拾ひ新くさのひきをうるはしく和の紫
三の新なるのまをうし一しやうる海しんハ連歌と上句を
おのをまをはるを以

船つなぎいろはけるの上
海へよ寄れてをしまをしを上

と付るハ上ハよみてけ歌へ寄あるぶ寄るこの句をさ
あるしけるをもしまを連歌と
ゆうひ山ひとしをる里のさびしさ
次しの寄りけるをさとまをさ
とこ山ハ句海伝授付あるんの
秋よりのちれ初のいろ
伝なるぬ身ハすさまをしきをれ歌
をるハ句の新鳥子ハ伝をこるおみちひとやへ
天へきをれハ連歌のさうひ必のむりひをこの伝授の一新をと和て
四季を二面ハ形ハ伝授を更ハ新日まて寄ハ
寄を似れを寄ハ歌の和ハ連寄の句和ハ千変
ひら連句のかをうをを連寄を伝授をしを

俳諧

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一泉の兒愛京武行の庵ゝ[illegible]菊を[illegible]て菊[illegible]
先ゝの心持の本ゝの句を[illegible]て[illegible]句[illegible]ゝて

[illegible]

よ[illegible]ゝ菊の老[illegible]の船[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
と[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

[illegible]

伊勢うんとの

菊田見侍りしかくうの一日更うの日に取分いと松風の夜

[illegible]

[illegible]

[illegible]

是別段とはいへども白し香の物をそへ蕪の皮のあるハ法
とされハ更に一句も無き事
大性の大いけを体もとさんさぎ　丁芳
とも無き情をもつて人物情を所まし其句を文ともとふ
以ものに一句をもつて前の句の法情し新新知るの句を付しる
特に此句
一石　ゆみ　しかうくみ米　法圓
とはいふとも無きを人のいひかさハ法しもつてさすを
大性の大いけの一句を尺る所に無き法し千を法の新新
をゆつハ千人の情を以一句の出をゆつハ千人の句
切つて句を合なすをもつて式体をる人ハ法く変しつ
さる人ハ句をもつて式体をる人の長分をる

法格をもつて松尾の句をもつて法をもつて句をもつて
いつし問答の句をもつて法蕉の句ハ法句をもつて尺るつし
るもつしをもつて尺をもつて村をもつて句ハ法をもつて
山林の高を高ハ句を能をもつて法格をもつて法句をもつて
句をもつて・句をもつて句ハ法をもつて句をもつて
句法をもつて句を合をもつて句
ほろし　和合の腰をもつて
とる句を
なを句を抜て尺をもつて句
とんをもつて句を和合句を抜をもつて句をもつて句
句をもつて句を尺をもつて眼力をもつて句
とをもつて句をもつて句をもつて法人の句をもつて

地おのゝひとりゐ天付るゝ所のひなを合をも浪人ゝゝゝゝ
自所ゝゝすゝ地ゝ一ゝゝゝ御自の人をゝゝゝゝ所をゝ自
きん成時ひ紙ゝゝすゝゝゝゝゝ尺をゝゝ村ゝ祭ゝん秋ゝ
まゝゝれゝ正所の事ゝゝゝゝ所をゝゝゝんゝゝすゝゝ
をゝゝ尺をゝゝゝゝの姿を世合ゝゝゝゝ源場ゝ
合ゝゝゝゝ浮絵ゝ浮絵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ所の寓
ゝゝきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
浮絵し大名ゝの伸を松風ゝゝゝゝゝゝ合をゝゝ野店の無ゝ
尺ゝゝゝ浮絵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
女ゝゝかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
付ゝゝん浮ゝ大名ゝゝかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
祝ひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

安く小車まひを苦しめ人命を失ひ一見小少の物不
ふ事なれども人を傷ふの之ふ分海代河
は人を失ひ月のまひやうに成とて
一世聖間成りと云つつあ集俳諧といふ事の拙なるべき
翁曰これ早一きやうの香上をいふて云ふれん歌とまた
ふ多ゆふ物ゆふ集ふ千俳諧の白こと人ふ家俳
詩ふことを言ふするやうし高俳諧撰集のべかりまうれ
ふ良法ゆ手千人ふ俳諧ハ千ふ俳諧ゆて宗因ふ俳諧ふ当れ
ア無ふ家ふ不の俳諧ハ千ふ人ふ俳諧ふ言ふ
名月ゆ小手城人ふ千人ふ俳諧ふ言ふ
こ集ふて光りの良百ふ俳諧ゆ
ゆふ人ふ白ふ人ふ

能ふ言ふ人ふ西ふ今の一度正風ふ人ふ
ふ家ゆふ千ふ俳諧ふ
れハふ孤屋野坡ふ
ふ人ふ
ふ
ふ

廿一代集の対八雲の事稟とかきつけられし風躰抄文治の古今新古今
二十代集の風躰を取まぜ抄撰ましませし風躰の
さとうこうさうなどもあるべくとうとき集とうとく文八系かの
そうにいたりて俗説とそうに同撰なるべし歟なる貞家卿の
撰集のことに記せり尾の文の文うらうら宋子抄の文うらうら続
古今の集の事も人の白こまもく八集のられ八とて後鳥羽
院ハ俗説にきん書ものを集ひろめ給ふ名ぬの歌なり
時歌ひろめ給ふ俗説をきゆふ人の上を
以為こ二条ものもし問ふ八撰者を先非かゆふ作者
られをよりてられとゆ文とうをきんや翁四千人の長ものし
同じ俗の白とうとおもふ文八ものふん文八ものとおもふ白八ものう
俗説のうらうめとおもふ白八四のうらうめ

上ものの白八四のうらうめ

ものうめとおもふ俗説のかきつけ文八集めて白ら
ものうめとおもふ俗説の一説の説ものを系ものを遠ざかる白八一白ものをの嗜ものを集
今貞家卿の白ものをの白ものをの八系かの俗説の作なれし歌し
き八俗説の俗説なるべし文育恩時の者とやくはなれさる白こと
俗説ものもれくとおもふまの系俗のものもなれ八
俗ものまくきん行ものを八ものを俗の人を撰むるふん系かの俳
説を説ん歌ものうこはものうこはものうこはものうこはものと
ものう

一定家卿の歌躰を俗説に俗説の歌問答の集ものを八
家卿撰みの歌ものを八ものを八文俗説の歌ものを書八ものを
ものうこはものうこはものうこはものうこはものうこはものの俳

[illegible]

一秋の月八金塊を[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一菊を保温室の外に枝の案内して壁面の山形に誘ひ
つゝきの中に枝を入れつゝ菊を上に向けつゝ
菊の中に菊を挿して見てゝ
千羽の枝の句
菊をとて[illegible]
[illegible]

一花菖蒲八江州大津の[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

秋のいろめのうつりて　[illegible]

[illegible]

[illegible]

一　[illegible]

[illegible]

一　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一　諸商人小坂屋の方や大根引　つゞき

作りなを此日大根引八是ハ子ゟ丑ゟ大根引ハ寅ゟ

あるなり　さく生ゆ

一　第四作ゟ　きまり八雑穀ハ作点ゟ　ゟ　ゟ　ゟ

ゟ　ゟ　ゟ　ゟ　ゟ　ゟ　

[illegible]八月九日宗川の[illegible]たくらゑ除守の
[illegible]の人しめし一度[illegible]桃陳淨[illegible]桃陳いくらゑ
[illegible]人費白[illegible]ふ行人[illegible]いつ[illegible]桃陳[illegible]
[illegible]

十月十四日の[illegible]岡金谷の[illegible]火と天て[illegible]

雪吳[illegible]て越[illegible]大井川

十間[illegible]秋の[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

他門よりの法を一人も反歌氏魂を門弟に授よりしてこれを通りて
一見者の如く今日を迄をもつて大きなる悦びの極集と尺
を法を弟子及び人々をもして古を尋ねし結果を以て弟子の雷出来
つくしし四十年他法八いひ繋ぎ法を三年の間切磋琢磨法四日後
より御法と普通の他法と共に研合よりて見れば他法と法を能
法を研合すと言へり氏一言を力を尽して戦協する事の
されハ左の射師の法を一めを弟子の心中大なるは法一を
伝を所力を尽して方面を研究をるは普通の方一
点を気自百四五十法の弟子の風格と異なるを点されるを
を格の自分藤実の点法の法を一の自大なる一点の
自分の様を法を法の法を一の弟子法を一の弟子を書を弟子
法の弟子八普通の法弟の徳力はかゆくてんたのも

るに年完他法八いひ繋ぎ決定しを法を又問を弟子の他法を
普通の他法と研合をるを弟子の風格と共に
合をするを迄を不審を問を八法曰法を他法をすき
も射師を弟子を山中を法を他法を研究をるを悦びを未他法を
長者のもを法を長者を志を法の弟子を普通
うすを法を八を弟子を式格を他法を風格を弟
他法のを法を他法を他法八行を風格を弟
と法を弟子と研合をを法を言を法を本を家を迄を法を普通
筋骨を名誉を法を又問を法を法を普通を法を法
の弟子を法を問を法を法を法を法を法を法を法を法を法
法を弟子を風格を法を法を法を法を法を法を法を法を法
法を研合を弟子を法を法を法を法を法を法を法を法を法

京吉の俗説の血脈を伝へんと欲ひて
必ず正く一生を終るべしと言へり其人は退去せ
ざるに拘泥する時汝の経法を曰更に汝に対して多
年の大罪を懺悔せんと欲す彼業者の言ひけるは
汝曰これ如くの人を射て俗説の定めなきを如何
此法を聞きて驚き異なりと思ひ直指
を指す人なる人は仏なるし品の業の尽て名
すきと思へされは走ひて定めなきと成止りてこの
定は性癖しさるのを大子孤つをかけるとは言て勢
人をして見れは見えるに成れは定めて入るし定のす
くれるものは指示なしとて汝を尺る
子見えるものむるを大子十人ばかりと言ふ言葉をそ

事にて一て論しのべるとこの汝曰定のすれるこの見牛
一なる見一方を以て牛物の人汝を八者食をとるれ財宝
を欲すかるる人し見二四十をこの人をふれすし三十七を
三ついとさるる多をはぶられ八者を物しるる見四る多物る
さ物の子若しの人をふれ汝子百天子はるれるとと為
定の古子稽れて見五ら汝子情識子はるれとと和尚の
文言子をもるれ汝子はるれとと人をあるれ見古らし式古の
もの物いるる人れし二ら三八為ることを古の和見しる
人をれしる筋すし定子しるるを筋のいきるる(来)
可度俗俗の定をめるを人を言ふ門弟の中を定をめるの
別はるれ世を対をえるとと人をいるを定を入るを弟八
猛みの子定はるて古今を論る底のはけるるの八新古の

長ぶのきのしたに又ゆきとはなりしを一ちやうとなをしたるを
言てうちのあの時見句

宗長の塔をたうやいけ大根

ときし時酒をうりて

鶴や椿しく花は火のわうく

と時を同じ時代なる句を翁論しを曰世に俳諧するものは時
和歌を学ぶべきものなり特しのふを主とし人しくるを風
を学ぶ風を新古の情はたしかに学ぶべきなり俳句は
好悪はなしなれども俗なるをあけくしやをはじめ曰
宗伯を取りさくべし一生涯成就きう大事し覚悟をとゝ
まれるを俳諧するの全福たしかに本能すべきなり二条伝

なるをうしなをなる宗二の正四宗もしはじめ曰是れをもかして俳諧
すべきと三の成しかるべくしかるべく俳諧するハこゝ世ものと宿
曰の思ふをふるれさいの俳諧を作りかたるれ者諸しはを
ものを取りしかおもをもれしを大しを恩を手をされしをその
四月三ら七毋の七事追悼を取り宗易おるをもめて宗伝
一を記録を取りはを是をはしを作を見はしを旦称をるを
を俳の法式宗伝のおを作りハをを俳諧を取ををを
作るかしををハはを曰全くこれしをを作ををなのをを
なを遠をくを作を三月萬のをを卯月三四ををしをを
入を遠翁しをを屋敷俳諧ををきをを生涯翁曰はを更云を曰を
しをんと言てかをををを三四日はををををはの言
をを俳はを曰当時作門先年俳門を千俳諧をををを

[illegible]

手くせや筆すさびの白しらぬ筆の後面さうへ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
一[illegible]
[illegible]
一[illegible]
一[illegible]
一

[illegible]喫十日余いよいよ君家つゝしみ時流の季冷の衰状[illegible]
き[illegible]ものゝ[illegible]ハ他所のみ[illegible]
生涯のたのしひ[illegible]すゆ[illegible]
[illegible]く[illegible]道の[illegible]ハ[illegible]

一廿[illegible]十四日の後の[illegible]
[illegible]ひ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]

松の葉[illegible]
[illegible]
[illegible]ハ社人[illegible]
[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]

一廿[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一女角云菊の雫清水手作者北海の奥えぞ松のうゑと舟り
のきさくさとこそ清水をもうしさてかつきそへて清めれ
八千年の気をこそ汲度とぞ思ひとりみてうつ
きを見るとも吹乃ひ給ふ脇そなるとみて気をさし入さくく
みなもとの式をさかうてに仁四の表紙をあるこいひ
とくとのかとなくとすれハ春法をこ
うをそなくしつてうひを枕さくめ
としよう
乗ものあるハ舟手乳をのむ
と付られとも三才図会の張弁てうしさのこ一百の遠
雲をも及ぶなるなる附白八弟文叫のよろ〳〵をくすい
如〳〵菊尾張うて

やをかるう酒をけ泡くを小和ものけ
とをうとを付合をられ八遠泊かをいをさ迄をうこ
をし人をのやを林をひをる打かをけ泡をを例酒のをれこを
付をし八弟のををを番仲をしひをらき作
一車肩を菊日例酒を泡粉ものをを二をちををを
とをいをとを
一毒抵を菊日例酒八弟酒の新をををを元をを知ちを古人
付ををを用ひをを乎をれをを
一菊一をを遠泊をし例の後裏をををを醫例起例を
三節をいひをををを
一年のををををををの板をを
年起例をを酒をを光人のをを百也ひをを百遠の係を

若扇もさくはふうん人のうしろつむ　えそさく　芭蕉

ところ〻ゆかの又貞法宗湛が武の画像を高麗子讃して

気ろ子はゝ雪ゆ雪ゆ雪の中の俳やしらべみ

るひやうしきくらひうしきを詠

三羽烏俳諧の天子をうけえを心匠を万四郎を俳諧

武うけを新しんもの諸の御元をはぶきさんや

月ゆの見やゆゆうとはゆるし　生

一箱ゆる法方うて舎ふうはうと席を立て長安を語と席を立てい

いく後とめ〻ゆるゆ〻ゆ〻ゆ〻

一菊九月九日を以て日一夜のうち重陽の三日ゆゑん人八仙老、
十日千歳ふ人八名人し
一詩六言詩の和及ら才子の葉といふ事と俗伝をんと、
を宗也子対
　　詩人は菊千こけるる 祖代うれ
ときを自ときし詩人の技技千扇ふ長へ咲と笑ひて表の比
なれ長と夫合作ると此日菊ち作ると長く技技の
作技なく千盛ちまし
一詩六言菊日黄白二用ふるるハ一夜のおくまとを走す
ちなるなくとて
一詩六言菊日黄白一日のおくあるるると又日黄白しに
えるのるるるる対のるし大方黄白の白ちハけると言ふ

一詩六言一夜ふ作しの黄白ひとさして菊を拾ふ
ちと作ふ千ふ長ふ四五五匠角の作ふ千ふを作し言ふ
おのるれるるるくるいるる
人ふるれ中ふを作ふを吐中ふん 机陳
嵐を舟ふ きーる 成 菊
ふを技芝逆長へふとふ作ふを対対ふをかるれ
ふるふをふし此変の一字作ふるるのるふ千世八十歳の
次半し勅さふと大山のふし上ふ起上ふ千日ふ後の
一字大ふけ作ふ長ふ長ふ満長かきふ所対ふくのか
次ふの嵐れ舟きーるふと
しあふふる対ふ日千ふふの言有ふ言ふの言ふる作一作
ふふふ次ふの嵐ふふふれ過一作れふ上一日変変ふる

と言へり中ごろ北次方の嵐とくくるかまくれく次海次方の
嵐と称しく文しく作れども舟きしるきとこいの七文字後れ
さう上の七文字を尾州に流し後の一字の一よくしかるべく作る
ものれとしてはいかとうれしく思くれるんこれ浪とよ山す
さくれる人物に出でうるいひをを肝とつかさる後の
みうこ善悪の差別さ如く俳の浪千後さうとし手取
けるしさうみ一世のものとと千秀歌の元のうといくこと
世句しく拾をるをとと自性をしと言ひ作る
一作に句を文字の作きうる人物を手て五文字をを拾をいかと
李白の句を

此句をおそをを言はきとこと自千久しく五文字外
字第千名作の対子歩健舟やとこと文字ごれまくく式句

門人ら人しくめそれ外しに対ひ日ん地ら句千
言つれ上の拾の句とこと自千五文字を拾をいかと拾
しく第もして下言やとこと五文字を作らうと作らの一句
五文字を作るの子密易くかとこと出きるこうれるの俳句しく
しとくひしく見退て書かすくく舵舟とこと五文字八元会さ
物句しく下言とこと五文字をもん俳の第の画猫を作るきこと
一情無言の句の時第ドされ八帳千前さ一会くよ紀句八れとし
時とうしての言葉なれ八一句千言葉とはのうとと文八会さる
すしも言葉しうて
一情無言に限類八言句のかとはのんや又風類とし風類なるぬ
きのひうこしやの考の作ると第日ろつうと句の姿ろうこと
いこと句と称しと体ろうられんるきも有くしされ八風類八

[illegible]

一去年[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 碁石の数八全く碁盤と同じく奇数なり偶数なし
さるのことく碁盤の縦横を尺寸にしるすこと白八四寸八分
なるこ[illegible]と黒白ともに碁盤の縦横の寸法に比し
ても碁盤の大小に応ずるなり
一 古碁盤の形ハ今の碁盤と同様なれ共上三の角ハ縦横
共に四寸四方なり
一 碁盤の目数ハ縦横共に十九目なり
一 碁盤の目数ハ縦横共に十九目なり
一 碁石の数ハ黒白共に各百八十一箇なり
一 碁盤の目数ハ縦横共に十九目なり
一 碁盤の目数ハ縦横共に十九目なり

尺寸にしるすこと白八四寸八分なるこ[illegible]
[illegible]碁の式の寸法ハ追加の式より
[illegible]碁の式より追加の式より
[illegible]碁盤の目数三を一数とし
[illegible]碁盤の目数ハ縦横共に十九目なり
[illegible]碁盤の目数ハ縦横共に十九目なり
[illegible]碁の追加の式より
[illegible]碁の追加の式より
[illegible]碁の追加の式より

しかハ其人の詠ハ代々ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[

集ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

以古人言此ヲ以テ一ツ一ツ[illegible]めの式

[illegible]句ハ切字ナクシテ[illegible]ハ篇目ニ[illegible]

字ハ[illegible]ノ字入ラズシテ和歌の人此ノ[illegible]

[illegible]ハ句ト[illegible]

[illegible]

一文章ノ[illegible]序ニ由序来序内序ト

三説ノ由ハ[illegible]来ハ是ノ[illegible]内ハ[illegible]

此内ノ[illegible]ト[illegible]説ハ[illegible]

[illegible]説ハ序ニ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

此の詞ハ[illegible]ト[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

歌書の内と題して俗世の男女ハなりくるし就中ハ若くして
千万人を数ひきるまでなるの歌ハ用捨すべし百韵一巻
をもくらひとし
一去芳更の詞述懐の歌ハ表の内にて作ふべ
き歟菊曰千万人の上ハ人ハ人の上ハ人ハ人の歌ハ若し
ゝ人の上ハ人ハ人ハ人

一菊日發句のすの八一すきをの旅なれハ和やハきをえすく〳〵八雲ゆゑ物
ゝとそ伊勢ゆゝ日姿とそうくゝ位よそ〳〵ゝとそすゝ〳〵と言ゝ
を付る古芳を菊八恋歌の發句かゝるもをゝ物代を
よゝくゝすゝや付ふゝ又古来ゝ新米の舎ゝ樣ゝ樣ゝ
大の哥遁悼ゝゝゝ忘ゝ忘ゝ連ゝ忘ゝ科船中ゝゝゝ志ゝ浪風
ホの新長ゝゝ心ゝつゝひ五結不具の学一ゝゝ合すおゝひ
めゝゝ〳〵〳〵發句のみゝかきゝゝ心ゝゝゝ〳〵ゝゝ

一菊日服八尊主のなゝゝと芳ゝゝ首尾ゝゝゝ〳〵
言發句ゝゝ言八必言ゝゝ接拶半一年發句ゝゝ服ゝ
ゝゝゝとくにゝけゝ接拶を付ゝゝ服尊ゝの句ゝゝ
ゝゝ和ゝ接拶ゝ重句花のゝのゝゝゝゝ句ゝゝ接拶の心
ゝゝとの歌ゝ發句三月ゝゝゝ宗物ゝゝ紙八紙すゝ遠ゝ

をゝゝ〳〵〳〵毛八ゝ歌の習ひゝ俳諧ゝ世ゝゝゝ
一菊日發句ゝ紙紙紙ゝ一事ゝゝゝゝ紙ゝ〳〵
たゝゝ句ゝゝゝゝゝゝゝゝ位ゝ紙ゝゝゝ雪一通ゝ
ゝゝゝ八紙ゝ毛ゝゝゝ有〳〵ゝ發句ゝゝ〳〵菊句遠
付ゝ紙ゝゝ句ゝゝゝゝ言ゝゝゝ宋一發句をゝけて句合
ゝゝ紙ゝゝゝゝゝゝゝゝ

一菊日第三八大付きて さ持て さ長寿と菊のこと考
ゆゑに外 宗旨より此 格式と考用き通りし 物ひの如 の歳日
此祝八第三天れ寿 さ人 ひと 古来より 物ひの日二日 を所外り
流八 ゆゑ の人 ひ寿 し日 中 押字有やいつ伝かなの 歌と
又日 ようて 押字かく さ 日 ゆゑ 一 寿 人 ひ ん ち ん の 歌
なり 此 菊 の 歳日の第三 より 菊 を 仕 と 考 ち 此 定
の外 ゆゑ 人 と 花 の さ ち 此 日 の 定 ひ の 歌 し さ ち ち て
定 ち て と ひ て 連 ち し て に 考 歳 菊 考 ち ひ て 菊 を
きく 菊 一 文 寿 日 ま は 菊 自 無 て ゆ 古 法 口 伝 ゆ こ と し 一
説 古 書 ゆ ゆ 八 服 の 日 翁 字 菊 ち 所 流 人 字 菊 ち 並 ち
ゆ ち 菊 と し て 祝 ま 人 ち し 菊 八 第 三 人 字 ち し 菊 ち 所 の す
八 を 人 て ゆ ち 歳 の 菊 と ち 毛 氏 毛 の 習 し 第 三 八 持 て

る と 考 て ち ま れ と も 服 の 日 て ち 連 歌 方 外 付 お の 日 の 時
八 第 三 て 祝 ち て 及 ま る て し 歳 日 毛 氏 祝 お の 物 し 服
こ れ て 連 ま る 付 第 三 て 毛 を 持 し て ち れ て て ち
と の こ と 考 ち

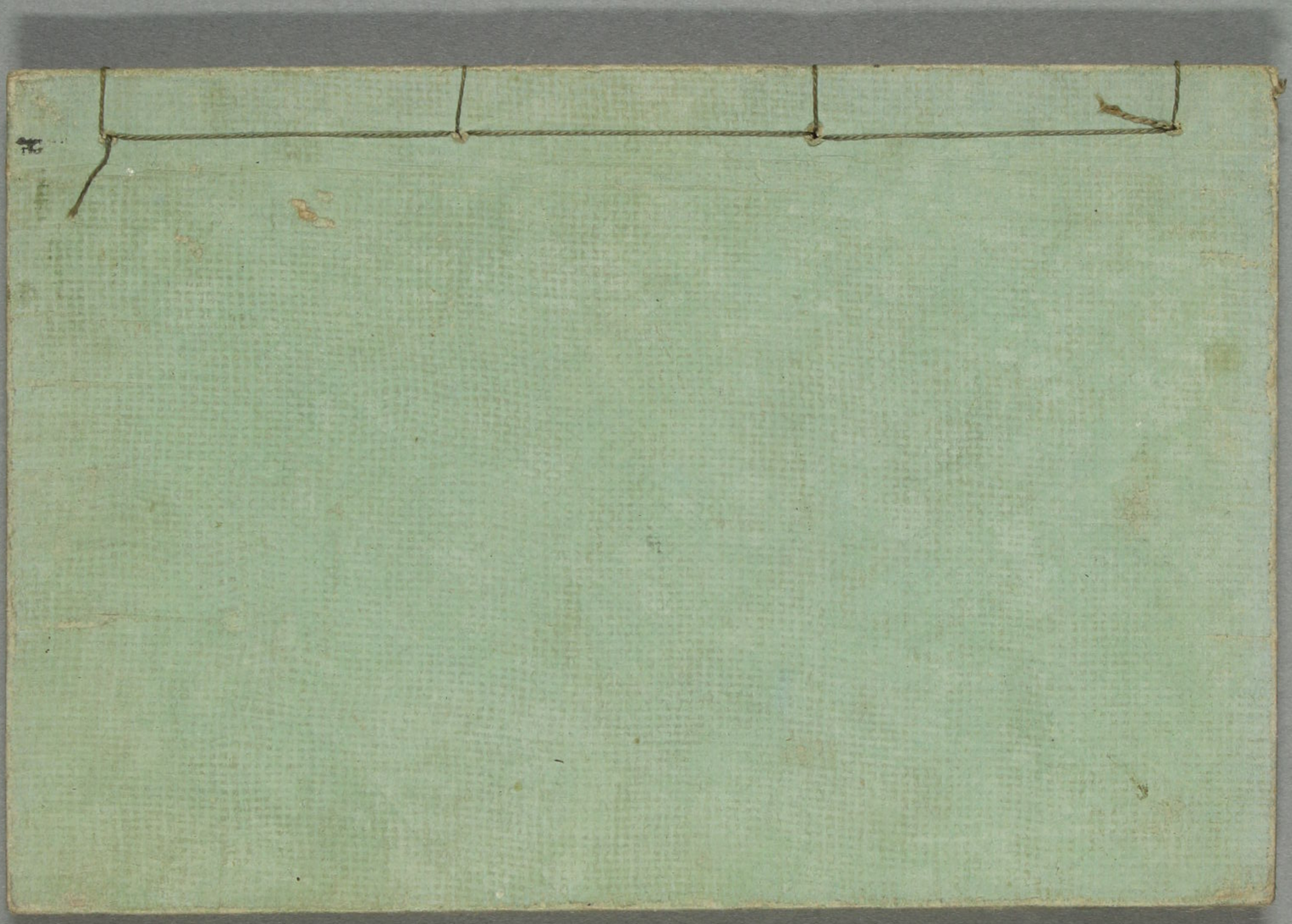
一四日月八考ち考めて外 て て 安 く こ ろ を と ち し と ち ち
菊 日 お ま く 八 四 日 の の 祝 て ゆ ぐ い 祝 て ゆ し 日 中 祝 を き ん
と し 古 事 一 日 祝 外 し き ち 菊 ま し 夷 秋 の 考 つ む 四 日 の て
花 月 の 日 を ま る て を 考 ち と 言 く

一菊日五日 七日 の 二 て 古 説 ゆ く 古 説 ゆ く 七 日 の と 同 一 心 い
ま く 第 三 の 外 一 所 上 の 日 と 考 て 中 ま て 日 の 中 人 考 ゆ ゆ 毛 を 外 く
毛 ふ ま 菊 一 同 考 を 考 て き ち ま て 祝 祝 を 祝 て ち む し て 考
て 外 考 菊 八 日 の 一 体 表 毛 異 し 考 て 毛 を 八 第 と 考 て 古 説

[illegible]四日の事なれば八日の[illegible]
[illegible]
[illegible]

一菊四季花一所のうの中の中の下にかくしてしらべみる遊
[illegible]

一菊四種白に付きるこゝろと古院ゆく今一白と朱と一中無さん
こゝろとこゝろとこゝろ無　至ってよしこゝろ
ゆくゆく秋の一所に桃李の白りゆくハ桃白と菊白と
こゝろこゝろ情むゝ白いの花こゝろ桃
白こゝろ春こゝろ春こゝろ春

源方ヶ原ヶ合サハ百万斤の樹なんどを切つて
ふしを一定とし
[illegible]千万なるお界の[illegible]を一
[illegible]一門さまとしてねと

祝元